

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

北海道整形災害外科学会雑誌 (2014.12) Vol.56 No.1:12-14.

【北海道における手外科 現状と課題】 旭川医科大学上肢班の現状と課題

入江 徹、研屋 智、三好 直樹、奥山 峰志、伊藤 浩、平山 隆三

## 北海道における手外科 現状と課題

## 旭川医科大学上肢班の現状と課題

入江 徹<sup>1)</sup>, 研谷 智<sup>1)</sup>, 三好 直樹<sup>1)</sup>, 奥山 峰志<sup>1)</sup>, 伊藤 浩<sup>1)</sup>, 平山 隆三<sup>2)</sup>

1) 旭川医科大学 整形外科

2) 進藤病院 整形外科

## 要 旨

旭川医科大学上肢班の現状は臨床分野の占めるウェイトが大きく、基礎研究や若手医師・ハンドセラピストの育成が進まない状況であった。今後は関連病院と連携を深めて診療と臨床研究を行いながら、基礎研究や若手医師・ハンドセラピストの育成に加え、手外科診療の普及にも力を入れることが課題である。

## 緒 言

旭川医科大学整形外科の歴史は、昭和50年に竹光義治教授が3人のスタッフから教室を開設した時に始まる。上肢班は、当時広島大学整形外科に所属していた津下健哉教授門下の平山隆三が当教室へ移り、1期卒業生を指導したことが始まりである。以後、大学で3人前後の教室員により上肢班を構成し、手外科や肩／肘関節外科、マイクロサージェリーの診療に当たる体制を整え、末梢神経に関する基礎研究を開始し現在に至っている。また、大学を離れた同門の医師達により、地域での手外科疾患の診療がつけられている。

本稿では、旭川医科大学および関連病院での上肢班

の現状と課題について言及する。

## 現状について

旭川医科大学整形外科では、毎年度3人前後の教室員で上肢班を形成している。そこに研修医が加わる体制であるが、昨今の医療事情の窮迫により旭川医科大学整形外科の新入医局員が非常に少なく、実質的にはほとんど加わらない状況である。結果として手外科を志す医局員も少なく、上肢班の構成員にも若手が入ってこない状況である。実際の業務についても臨床分野の占めるウェイトが大きく、臨床研究が中心となり基礎研究にまで手が及んでいない状況が長らくつづいている。平成19年より日本手外科学会専門医制度が導入されたが、専門医の不在により旭川医科大学病院は手外科認定研修施設の資格を取得することができず、若手の医師が大学病院で研鑽を積んでも手外科専門医試験受験資格を取得できない状況がつづいていた。

臨床分野の中心となる手術について見てみると、大学病院上肢班における平成25年度の手術件数は244件であった。整形外科全体や救急外傷の手術件数と相まって、年々増加傾向にある(図1)。平成25年度の

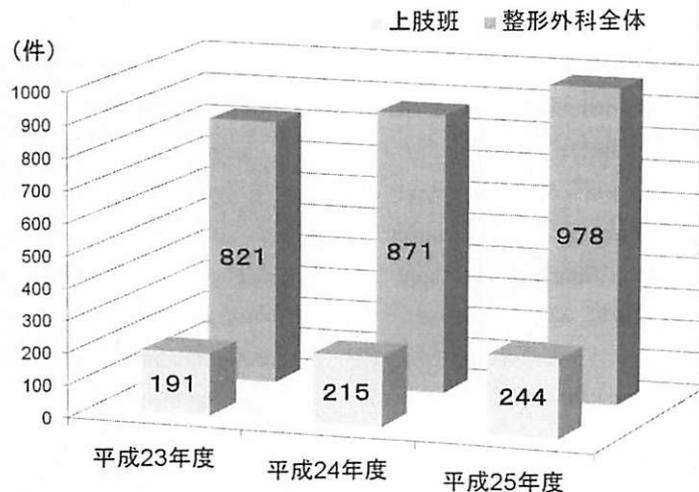


図1

表1

分野	内訳	件数
肩関節外科：49件 (20%)	腱板断裂	29
	反復性脱臼	8
	肩全人工関節置換術	4
	その他	8
肘関節外科：29件 (12%)	肘部管症候群	9
	肘離断性骨軟骨炎	5
	上腕骨外上顆炎	3
	変形性関節症	2
	肘人工関節置換術	1
	その他	9
手外科：99件 (41%)	手根管症候群	43
	手指腱鞘炎	15
	母指CM関節症	9
	腱再建術	9
	多指症/多趾症	5
	その他	18
	その他	12
外傷：49件 (20%)	鎖骨骨折	2
	肩脱臼骨折	3
	上腕骨骨折	13
	前腕骨骨折	15
	舟状骨骨折	2
	切断指 再接着	1
	前腕不全切断	1
	その他	12

手術件数の内訳は、肩関節外科49件 (20%)、肘関節外科29件 (12%)、手外科99件 (41%)、外傷が49件 (20%)、などであった (表1)。近年の傾向として、肩関節外科の手術症例が増加し、肩関節鏡視下手術や肩人工関節置換術の占める割合が多くなっている。旭川地区をふくむ道東～道北地域では肩/肘関節外科を取り扱う医療機関が少なく、今後も当院の役割として肩関節手術の需要に応じてゆく必要がある。しかし、相対的に肘関節外科や手外科の症例については、手術に際して制限が加わることになる。手術を待機する期間が長くなったり他の医療機関へ治療を委託したりと、地域の手外科に対するニーズへ十分に対応できていない状況である。また、平成22年度より旭川医科大学病院に救急救命センターが設立され新規外傷搬入症例が増加しているが、救急部門専任の整形外科医が不在のため、現状では整形外科医が初療から手術、術後のフォローまで行わざるを得ない。急な外傷に対応できなかつたり手術待機症例の調整を図ったりしながら何とか対応している状況である。

平成25年度手術件数の入院/外来の内訳を見ると、入院手術164件、外来手術80件であった。入院病床に制約があり、手外科症例は侵襲が少なく比較的短時間で入る症例が多いことから、可能であればできるだけ外来/局麻手術で行う試みに取り組んでおり、手根管症候群に対する手根管開放術や対立再建術、各種の

腱移行術、デュピュイトレン拘縮に対する手掌腱膜切除術などに適応を広げている。増加してゆく手術症例に対応すると同時に、患者のQOL向上も図る手段として、有用性を検討している。

入院病床の制約は、術後のリハビリテーションへも影響してくる。とくに手外科の手術においては、術後のリハビリテーションが非常に重要な役割を担っている。しかし、特定機能病院として平均在院日数短縮をめざす課題もあり、手外科をはじめ上肢手術の症例では手術後短期間で退院を余儀なくされることが多い。そこで、近隣の医療機関にリハビリを依頼したり、理解力のある症例には外来でのリハビリ指導を行ったりして対処している。しかし、理学/作業療法士と綿密な連絡がとりにくかったり、細かいプログラムの指導までは困難であったりといった問題点もある。当大学には創設当初よりリハビリテーション科がなく、理学療法士2人程度が手外科や上肢外科の術後症例のリハビリテーションを担う体制が長年つづいていた。平成23年度より当大学にもリハビリテーション科 (大田哲生教授) が新設され、平成24年度からは理学療法士の増員に加えて3人の作業療法士が着任した。まだ手外科のリハビリテーションが本格的に行える状況とは言えないが、今後は整形外科とリハビリテーション科の連携を強めながら、徐々に症例と経験を積み上げハンドセラピストを養成して手外科症例に対する専門的なプログラムも組んでゆけることを期待したい。

大学での上肢班の活動に加えて、同門で手外科専門医をもつ医師が3人おり、地域における手外科診療に当たっている。大学上肢班の人員だけでは、経験的に難度の高い手術症例などもあり、関連病院の医師の意見を参考にしたり直接手術で指導を受けたりしながら治療を行っている。

それぞれについて紹介すると、

(a) 旭川地域：

(i) 進藤病院

整形外科関連病床：96床

整形外科医師：7名

形成外科医師：1名

専門医：平山 隆三

平成25年度の手術件数：719件

うち手外科症例：150件

内訳：骨折34、腱手術38、神経障害38、

腫瘍13など

ハンドセラピスト：6名

(ii) 大西病院

整形外科関連病床：80床  
 整形外科医師：1名  
 専門医：中村 智  
 平成25年度の手術手術件数：50件  
 内訳：骨折20, 腱手術11, 神経障害11  
 腫瘍2など  
 ハンドセラピスト：なし

#### (b) 函館地域

函館協会病院  
 整形外科関連病床：48床  
 整形外科医師：2名  
 専門医：多田 博  
 平成25年度の手術件数：152件  
 うち手術症例：71件  
 内訳：骨折/外傷30, 神経障害30など  
 ハンドセラピスト：1名

各病院とも、手術専門医として紹介症例を受け入れて、地域の手術治療に貢献している。しかし、手術にに従事できる医師数が少なかったり、病院の規模から麻酔の制約があったり、ハンドセラピストが少なかったりなど、十分な診療に臨みにくい状況も抱えている。

#### 今後の課題について

平成24年度より進藤病院が手術基幹研修施設に認定されたことにともない、旭川医科大学病院も手術関連研修施設の資格を取得することができた。手術を志す若手医師の基盤ができ朗報と言えるが、これに満足せず将来はぜひ手術専門医を輩出して、手術基幹研修施設の認定を取得したいものである。

若手の育成が伸び悩む中で、18期 松尾卓見や、22期 奥山峰志など、手術を専攻し広島や新潟へ積極的に国内留学を行って研鑽を積む医師も出てきている。現状では、大学病院で経験できる疾患や手術に限界があることも加わって、今後も同じ志を持つ者が現れれば国内外で研鑽の機会を与えられるよう努力したい。

臨床面の課題については、現状の体制を考えると大学病院だけで症例や治療に限界があると思われる。今後は、関連病院との連携を深めながら、限られた資源を最大限に活用して幅の広い診療と臨床研究を行ってゆけるよう取り組みたい。外来/局麻手術への試みをさらに拡大して、将来的には全麻手術も日帰り可能なデイサージェリー体制を導入することも検討したい。現行の診療体制ではまだ問題点も多く導入には

至っていないが、増加してゆく手術症例に対応できると同時に患者のQOL向上も図れる、より有用な手段であると考えられる。

教育面の課題については、学生に手術や上肢外科の魅力を伝えることが重要と考えている。医学部を実習する学生に対して、マイクロサージェリーや肩関節鏡の技術を体験する時間を作る試みにも取り組んでいる。

研究面では、臨床や教育の課題に取り組むと同時に、大学としての使命である基礎研究も再開したいと考えている。

旭川地方では、脊椎外科や股/膝関節外科の需要が大きいのにに対して、手術の認知度は決して高いとはいえない。平成9年より旭川地域における手術診療の普及をめざし、市内の手術に従事する整形外科医や形成外科医が連携して「旭川手術を考える会」が開催されている。一般整形外科医や理学/作業療法士に対して、年3回の手術に関する症例検討や講演会を精力的に行うことにより、手術診療の普及や若手医師/ハンドセラピストの育成に貢献するべく努めている。

#### 結 語

旭川医科大学上肢班の現状と課題について述べた。大学病院だけでは症例や治療に限界があり、今後は関連病院との連携を深めながら幅の広い診療と臨床研究を行ってゆきたい。同時に、基礎研究も行って臨床に還元したいと考えている。また、若手医師やハンドセラピストの育成と手術診療の普及に力を注いでゆくことも課題と考える。

#### 【キーワード】

- 1) Asahikawa Medical University (旭川医科大学)
- 2) Department of Orthopaedics (整形外科)
- 3) Section of the upper extremity (上肢班)